

# 保育者養成における「生活文化」概念の可能性

須賀由紀子

生活文化学科

The Possibility of the Concepts of 'Life and Culture'  
in the Training Education for Nursery Teachers

Yukiko SUGA

*Department of Human Sciences and Arts*

This paper searched for the contents of training education for nursery teachers from the concepts of life and culture by considering a famous Japanese philosopher, Prof. Kiyoshi Miki's works on the better life. It told us that the key idea for making quality of life was to enjoy the life with culture, play and nature. It also said that we needed to have the abilities of liberal arts to realize such life. From this Prof. Miki's thought on the quality of life, the author pointed out the importance of the liberal arts education in the training for nursery teachers by using the picture books which showed plenty of important messages for the life with humanity. And also from the viewpoints of 21<sup>st</sup> life and culture, it might be needed to have a sense of wonder for nature in the children's minds, so to select good picture books showing abundant examples of the charms of nature which is important for nursery teachers training programs. The conclusion was that we needed to think about the importance to select the best works of picture books and to use them for the liberal education for the nursery teachers to create their quality of life as well as to qualify the nursery school programs.

Key words : Training Education (養成), Nursery Teacher (保育者), Life and Culture (生活文化), Liberal Arts (教養), Picture Book (絵本)

## 1. 緒言

少子化や核家族化にともなう家庭・地域の教育力の低下、女性の社会進出、就労形態の多様化などを背景に、未就学児の保育所保育および幼稚園教育の責務を負う保育者に対する需要は、質・量ともにますます重要性を高めている。保育の仕事は、単に養育を必要とする子どもを一定時間「預かる」ための人手であるのではなく、集団の遊びや生活の中で子どもの育ちを支援する大切な役割を担う。また今日においては、核家族化や情報化の中で孤立し、様々な不安を抱える保護者に対する子育て支援の役割も求められる。保育者は、現代社会の特性をしっかりと捉える目を持ち、子どもの育ちに対する確かな知識をもとに、子どもと、保護者と、あるいは同僚と、良好なコミュニケーションをとり、子どもの大切な時間を支援する構成員と行動力を持ち合わせる必要があるなど、高度な知識・技能を必要とする職種となっている。子育ての

中心が家庭力・地域力にあった時代から、社会全体で子どもを育てていこうとするこれからの時代の中で、子どもに人格的に関わる保育者の資質をどのように高めていくかは、大きな社会的課題といってもよい。

この要請に対して、養成校はいかに応えていくか。それは、保育者の総合的な人間力をどう高めるかということと関わる。この点に関して、岩崎は、現場保育者への聞き取り調査を踏まえて、「多様な現実世界に対する認識力と異質な他者を理解しようとする力」「他者の言葉や心の声に耳を傾け、自分自身の考えを根気よく正確に伝えるコミュニケーション力」「他者の批判や助言を受けとめられるような柔軟性にもとづく向上心」「保育実践につながる思索や研究をする力」を、「保育者に求められる力」として挙げ、こうした力を本当に身につけるためには、保育内容・技術に直結した「即戦力育成」よりも、「職業活動を通して成長をしていく存在」として保育者を捉え、その基礎と

なる力を育むため、現代社会の特質を論じた良書を根気強く丁寧に読んで議論する「教養教育」の重要性を指摘している<sup>1)</sup>。また、海口は、保育者の専門性を、一定の知識・技術を身につけた上での「臨機応変の対応力」とし、そのためにはきわめて概念化が困難ではあるが、「人間性」とか「わざ」というものが必要で、そうした「人間性」や「包括的なイマジネーション」を、個人的な素質や人柄のレベルを超えて、どのように教育するかが課題であるとしている<sup>2)</sup>。さらに、水野らは、「教養教育」の意義や現代教育における重要性、役割について整理をした上で、保育者養成における教養教育のあり方についての検討を行っている<sup>3)</sup>。

以上のように、保育内容や保育技術に関わる深い子ども理解、実践力の習得もさることながら、保育者自らも人間として成長していく基礎となる「総合的な人間性」をどう高めるのかということが、保育者養成の共通の課題となってきた。しかしながら、「保育の仕事は、日常行われていた子育ての延長にすぎない」という考え方や、受け入れ時点での学生の学力的資質の問題などから、「実践力」と並行する「教養力」「人間力」の育成のための養成教育のあり方の検討は、まだまだこれからというところが実体であろう<sup>4)</sup>。

本稿では、このような現状を踏まえ、保育者の人間的育ちに主眼をおいた保育者養成のあり方について、「生活文化」の概念から考察する。

ここで「生活文化」とは、文字通り、暮らしの中に生まれる文化の姿、すなわち人間の生活様式そのものとして捉える。それは、マクロ的に見れば、民族、風土、歴史の中に長い年月をかけて育まれてきたものである。たとえば、日本の伝統的年中行事の数々、農事に伴い自然と人が共存する里山の営み、あるいは日本の風土に根ざした衣食住の習慣などがこの意味での生活文化にあたる。その中には、長い年月の中で培われてきたこの国の人々の知恵が結晶されている。一方、人々の暮らし方は、伝統に留まることなく、その時代の流行、モダン・センス、新しいものの見方、考え方の影響も引き受けながら、少しずつ、あるいは劇的に新しいものへと生まれ変わる。平成と昭和の間でも生活様式や生活価値観に違いがある。昭和の中でも、戦前、戦後すぐ、高度経済成長期、そしてそれ以後、この変遷の様相を思い浮かべれば、それがいかに時代性を伴うものであるか理解されよう。人間としての生活

の原点を培う保育においては、伝統の生活文化の中で継承されてきた「変わらない価値」のよさを引き継ぎ、子ども達に「帰るべき心の故郷」を育みながら<sup>5)</sup>、同時に、経済・社会の現状を正しく理解し、これからの時代の暮らしが向かうべき新しい価値観も見据えて、未来の「地球市民」を育てるという姿勢が求められる。

一方、それぞれの時代を振り返ることによってステレオタイプ化される生活様式も、ミクロで見れば、日々懸命に生きる生活者一人ひとりによって日常生活の中に紡がれていく暮らしの集合体である。こうした個々の生活者の姿に目を向ければ、その時代の社会の状況や自らが置かれた境遇を引き受けながら、人間としての力を精一杯働かせて心の充実を求めて生きる姿が暮らしであり、それがすなわち個々の生活者が創る「生活文化」ということになる。他の動物とは質を異にする「文化的存在」である人間は、生来、「善く」「幸福に」「美しく」生きたいと願う。そうした暮らし自体が、「人として生きる」ということにともなう文化の営みなのである。このような意味で、日々の生活を「ただ（生物的に）生きる」のではなく、「文化的営みの結晶」と捉えれば、日常のひとつときに「人間として生きる」ことの意味を感じ取り、暮らしを愛する心が生まれる<sup>6)</sup>。この「よりよく、より幸福に生きよう」という人間の本性から生まれる一人ひとりの生活文化の創造は、すべての生活者にとって大切な姿勢であるが、とりわけ、人としての育ちの原点を預かる保育者が、自らの暮らし方の課題として意識すれば、それは、保育の心にも活かされるであろう。

このように「生活文化」の考え方をおくことによって、より豊かな人間性が求められるこれからの保育者養成のあり方に、何らかの示唆を与えることができる。そこで、本稿は以下に述べる手順に従って、保育者養成における「生活文化」概念の可能性について検討していく。まず、節を改めて、「生活文化」というものの捉え方について、戦前、生活文化についての論考を残した哲学者三木清のテキストに従って考察し、保育と生活文化の関わりについて指摘する。次に、一人ひとりがよりよき暮らし（生活文化）の創造の担い手となるために必要なことは何かという観点から、保育者養成への視点を考察する。最後に、マクロ的に捉えた「21世紀の生活文化」の方向性から保育への示唆を加え、これからの保育者養成への視点を包括的に展望する。

## 2. 三木清による「生活文化」の思想

「生活文化」という言葉は、戦後の高度経済成長期を経て、「ものからこころへ」という生活意識が顕著になった 1980 年代後半に関心が寄せられたが<sup>7)</sup>、その時に繙かれた文献に、三木清の「生活文化と生活技術」という小論があった<sup>8)</sup>。この論考は、太平洋戦争前夜、理不尽な軍部のファシズムが声高に鳴り響く時代の空気の中で、日々の暮らしを愛する心を守ることこそ、人間が人間であるための最後の砦であることを論じたものであり、戦後復興から高度経済成長の時代の中で、個の生活よりも集団主義の会社生活を優先させ、「エコノミック・アニマル」と評された日本人が、「ものからこころへ」を求める時代に再び繙かれたとき、個の生活のあるべき姿、人間らしく生きるということの意味への示唆を改めて与えたのである<sup>9)</sup>。

三木は、「生活文化」について、次のようなことを述べている。

人間は、本来的に文化的な存在である。ここで文化とは、「(言葉の定義に依れば) 与えられたもの、自然のものに働きかけて人間が作り出すところの一切のもの」をさす<sup>10)</sup>。「人間は環境から働きかけられ、逆に環境に働きかける。そこに形成されるのが文化である。文化は人間の外部に作られるのみでなく、人間自身もまた文化的に形成されるのである」<sup>11)</sup>。文化とは、あるがままのものに働きかけをして、それをよりよいものに作り替えようとする人間の意志の営みである。その人間がつくりだす生活とは、それそのものが一つの文化であると言ってよい。しかるに、「文化的な生活」とは、高尚な文学や芸術に取り囲まれる生活を指すのではなく、「守るに足る暮らし」を築こうという意志から生まれるのである。その意味で、国家による文化統制がどのように厳しくなろうとも、自らの暮らしを「よりよく、より美しく」という憧れのもと工夫し作り出していく営みが存在し続ける限り、文化的存在としての人間性は保たれる。「生活文化」という視点から見れば、「文化」は、文化人や知識人あるいは芸術家だけの問題なのではない。日々の暮らしを精一杯紡いでいこうとする、名もなき一介の民衆すべてにとっての営みである。すべての国民が「文化の創造者」なのである。そうして、「文化への意志」の裾野を拡げることが、社会全体の質の向上にもつながる。

では、そうした生活文化に必要なことは何か。三木

は、「生活こそ文化」という捉え方を強調し、我が国の伝統の暮らしの中で培われてきた衣食住生活そのものを大切に、長年暮らしの中で培われてきた民族の心を自らの暮らしの中に引き継ぎ充実させていくことがまずは大事であることを提唱する。それに加えて、音楽や美術や文学、あるいは科学技術といったいわゆる「文化生活」の楽しみを深め、そこに見いだす美的精神を暮らしに取り入れて、「より美しくありたい」という意志のもと生活を充実させていくところに、新しい生活文化が生まれるとする。

一方、過去の伝統の暮らしの中にあつた封建主義の弊害は廃しなければならない。そのためには、新しい時代の自由主義の精神のもと、一人ひとりが封建的閉鎖性を克服し、「善く生きる」「善き生活を築く」という善なるものへの意志を共有する「協同主義の生活様式」が大切である。その事例として三木は「隣組」を挙げているが<sup>12)</sup>、日本は伝統的に農耕社会であり、農耕の営みには水の共有が欠かすことはできず<sup>13)</sup>、農作業は村単位での協同の作業であり<sup>14)</sup>、そこに、協同主義の精神の伝統がある。協同主義は、画一主義とは異なる。付和雷同の画一的集団主義が協同主義ではなく、自律した考えを持ち、主張するところは主張し、相手の言い分も聞いて、自分が引けるところは引くという個人主義に根ざしながら、お互いの関係性を作っていく。それがこれからの「協同主義」である。

ここに示されている思想は、日々の生活における「(長い伝統の中に培われてきた) 真なるものへの愛、美しき芸術に感じる歓び、善き行為を畏れる心」<sup>15)</sup>の大切さであり、人間の営みを保証する「真善美の価値」に根ざした文化への意志に満ちた暮らしが「生活文化」の礎となるという考え方である。三木にとって「生活」とは、「ただ生きるのではなく、正しく、善く、美しく生きる」という本性を持つ人間精神を実現させる場である。もとより、「真、善、美という理念を自覚して、それに向けて自らを磨いたり、内的喜びを感じたりするのは、完全に人間が人間であることの特徴であり、真と善と美こそ、人間の文化活動を保証し、刺激し、維持する価値理念」<sup>16)</sup>であり、「真善美の価値」への憧憬は、人間らしい暮らしに不可欠である。以上から、よりよい生活文化の創造の基礎となるのは、第一に、人間精神が生来志向する「文化の価値」に根ざした暮らしと捉えることができる。

もう一つ、生活文化の創造には「娯楽」が大事であると三木は指摘する。それは、「生活を明朗、健康にする」ために必要なものであり、我々が「全人」となるために必要なものであり、「一つの立派な教養である」<sup>17)</sup>。そして、「専門的でない一般的教養は、娯楽の形式で生活の中に入ってゆくといいよ」<sup>18)</sup>と述べられているところから、三木の言う「娯楽」とは、パチンコやギャンブルといったような享乐的な娯楽をさすのではなく、映画や音楽、読書の楽しみ、文芸・芸術・スポーツ全般を楽しむような文化的活動を、趣味として楽しむような暮らし方、そして、生涯にわたって自分の人間的素養を深め、精神的拠り所とできるような要素も含んでいるものと考えてよい<sup>19)</sup>。彼は、「娯楽というものは、生活にとって部分のもの、生活の外にあるもの、単に生活に付け加わってくるものではなく、生活の中にあって生活を構成すべき一つの要素である」「娯楽というものは、生活の一つの形式として我々の力を普通に使用されているのとは違った方面に働かせ、あるいはまた我々の普通は使用されていない力を働かせる」<sup>20)</sup>と、その意義を強調している。

このような「娯楽」は、「生活の必要」「真面目な暮らし」のもう一方にある、あるいはそれを裏から支える「遊びの価値」である。「食べること」と「働くこと」は、「生活に必要」だが、文学もスポーツも音楽も美術も映画も、すべて日常の生死に関わるものではない。しかし、精神的存在である人間が「人間である」ためには、欠くことはできない。そして、歴史家ヨハン・ホイジンガが人々の生活文化の歴史の中に、人間にとっての遊びと文化の関係を見いだしたように、人間は「遊び」を「美しく遊ぶ」「真剣に遊ぶ」という性質を有しており、「遊び」の形式の中に文化は紡がれていく<sup>21)</sup>。犬も猫も「遊ぶ」。けれども、「遊び」の形態の中に、美と神聖なるもの、そして競争の精神が注入されることによって、人間は「美しく遊ぶ」ことができる。そのことが、人間が人間であることの営みであるところの文化となる。この「遊びの価値」もまた、生活文化の創造の柱の一つと考えられる。

さらに、以下に述べるように、三木清の生い立ちと仕事から、彼の生活文化の思想の礎に、「自然の価値」を加えることができる。

「生活者主体の社会」の意味を問う中で、三木清の生活文化論に注目した天野は、三木の幼少年期に彼の

生活文化の思想の原点があることを指摘する<sup>22)</sup>。天野は、三木が兵庫県の半農半商の家の生まれであること、そして、「今少年時代を回顧しても、私の目に映ってくるのは、郷里の自然とさまざまな人間」<sup>23)</sup>「今も私の心を惹くのは土である。名所としての自然でなくて土としての自然である。それは風景としての自然でさへない」<sup>24)</sup>と三木が語っていることに着目する。そして、彼の「生活」のイメージの中には、幼少の頃接した土に生きる農民の姿が刻まれており、彼のいう「生活者」の原型は、「土としての自然」にたえず働きかけをして創意工夫して生活の糧を得、自然の恵みの恩恵に感謝しつつ、生と死を身近に感じて暮らしを営んでいく農民の姿にあるとする<sup>25)</sup>。

また、三木は「読書における邂逅」と称すべき書物の一つに、徳富蘆花の『自然と人生』をあげており、一高時代に「ほとんど毎日曜日弁当を持って、ところ定めず武蔵野を歩き回った」のも、その根本には蘆花がある、と述べている<sup>26)</sup>。そして、青年期の混迷する精神の中で「私の弱い心は静かな自然の抱擁を求める外道を知」らず、しばしば武蔵野を訪ね、「自然は全ての不平と反問とを葬るにまことに適しき墓である。草原に寝転んで青い大空を仰ぐとき、雑木林に佇んで小鳥の声に聞き入るとき、私の憂いたる心もいつとはなしに微笑んできた」<sup>27)</sup>と回想し、彼の思想の礎に自然の大いなる力が関わっていることを窺わせる。このような著述から、自然との調和の中に人間の生の本質を感じ取る日本的心性が、彼の生活文化の思想の原点にあると考えられる。

一方、西洋の哲学を自身の仕事の基礎とした三木は、自然と人間とを鋭く対立させる人間中心主義的な西洋の自然観にも傾倒している<sup>28)</sup>。西洋の思想においては、パスカルのいうように、人間は、完全なる神と動物の間の「中間者」であり<sup>29)</sup>、有限の肉体を通して感受することを通して、目に見えない永遠なる神に近づくことをその本性とする。つまり、「超・自然」の価値へと開かれることこそ、感性的・精神的存在である人間の自然性であり、そこに人間の文化も生まれる<sup>30)</sup>。その意味で、人間は、「超・自然へと開かれた自然の世界において存在し、生きている」のであり、「物質的のみならず霊的な存在をも、可視的なものだけでなく不可視的なものをも包括するような自然の世界」<sup>31)</sup>の中で人間の精神を見つめて始めて、人間の存在を理

解することができる。自然の美や深遠なる静けさは、そうした超自然の価値へと人間を導く力を持ち、至高なるものへの登高の道を拓く。そこに照らして、より高いものへと歩むところに、文化的存在としての人間の姿が生まれる。三木の生い立ちにみる大地に根ざした自然の価値と、彼が専門とした西洋思想における超自然の価値を内在する自然の価値、こうした自然の価値をいかに暮らしに取り入れるかも、生活文化の創造に大切な要素となると考えられる。

以上の考察を通じて、「生活文化」の創造には、「文化の価値」「遊びの価値」「自然の価値」が大切であることが導かれる。これらは、大人の生活のみならず、子どもの伸びやかな成長においても大事であり、子ども時代に、これら三つの価値に根ざした生活をしっかりと保証することは、後の「生活文化」の基礎となると考えられる。

このように「生活文化」の概念を置くことによって、これからの保育者のあり方に次のような示唆を与えることができる。まず、子どもと関わる保育者自身が、「生活文化」の創造を自分の人生の課題として意識する。そのためには、三木清の論考に従えば、「文化の価値」「遊びの価値」「自然の価値」を暮らしの中で意識的に大切にし、人間が人間であるための「人間らしい生き方」を主体的に創造していく。そうした保育者の姿勢は、園の活動内容や保育の心に影響を及ぼし、子どもの生活を「文化の価値」「遊びの価値」「自然の価値」で満たすことへの理解が深まる。そうして、自分の人生で大切にしたいものの価値と、子どもの生活に手渡していきたいものの価値が一致するとき、仕事と自分が切り離されるのではなく一体化して、保育の仕事が、人生全般にわたり、自らを深めることと重なり合う。そうした保育者のもと、「文化の価値」「遊びの価値」「自然の価値」の喜びを十分に満喫した子どもは、自らの精神の帰るべきふるさとがしっかりと育まれて、その後の人生においても充実した「生活文化の担い手」となることができる。

このように考えると、保育者自身が「生活文化」の理念のもとに自らの暮らしを創造し、「文化の価値」「遊びの価値」「自然の価値」をその本質から理解し、内面化するような営みへの意識づけが大切であり、このことこそ、保育者育成に必要な教養教育となる。

では、そのためには一体どうすればいいのか。その

方法論について、次節において再び、三木清の生活文化論にたずねながら考察をすすめる。

### 3. 「生活文化の担い手」となるために必要なこと

三木清は、人間の行為とはすべて何かを作り出すものであり、そこには必ず技術が必要であるように、生活も人間の行為により形成されるものであり、その形成のために、「生活技術」が必要であることを強調する。ただし、「ここに生活技術とは、単に金銭の遣繰算段とかあるいはゆる世渡りの術とかをいふのではなく」<sup>32)</sup>といわれているように、ここでいう「技術」とはノウハウではなく、あらたな望ましい暮らしの「かたち」を構想し、それを作り出していく「生産乃至創造」<sup>33)</sup>にかかわる力となる<sup>34)</sup>。この「技術」とは、形相の構想に関わるものである<sup>35)</sup>。形相を構想するためには、想像力、人間の知性の力が必要である。そしてそれを実行するためには、それに対する愛、パッションが必要である。理性の力と情熱の力とが融合するところに、新しい暮らしを創造する技術も生まれる。

その「生活技術」のためには、究極のところ「技術の技術」ともいうべきものが要するという。それは、「全体を捉える理念(イデー)的なもの」であり、また「叡智」と言っていることから、「生活技術」とは、人として生きていくための拠り所となる本質的なものの捉え方と考えられる。それが確かであれば、実現のための具体的手だては自ずと生み出される。つまり、「生活技術」に大切なことは、マニュアルではなく、発想力、考え方である。その基盤となるのが「叡智」なのである。

「叡智」とは「深遠な道理をさとりうるすぐれた才知」(広辞苑)であり、東洋的には、自然に倣い、自然から教えられるものであり<sup>36)</sup>、また、西洋のヒューマニズムの伝統に照らせば、「古典研究を介して言語に習熟する」ことがその一つの手立てとなる<sup>37)</sup>。従って、よりよい生活文化を形作るための「技術の技術」とは、たとえば、日本の心を伝える詩歌文芸の古典の言葉、伝統的衣食住文化の心、あるいは神社仏閣のたたずまいや庭園の思想、茶道・華道・香道・武道といった「道」の精神、農作業の営みと祭りの文化など、日本人の築き上げてきた生活文化の営みの中に、古来日本人が「よりよいもの」「より美しいもの」をもとめて、どのようなものの捉え方を大切にしてきたのかを学び、その深みに自らの心も沿わせながら、暮らしの文化を築い

ていくことである。あるいは、日本という枠内にとらわれずに、世界文学と呼べる古典や芸術の中に人間が求めた真善美の本質を学びながら、自らの心を高めていくことが、生活技術なのである。

このような文芸・芸術の楽しみを深める営みが、「生活技術」の叡知の力を育む。従って、「保育に直接役立つ、生かせる」ということから離れて、保育者自身も、生涯をよりよく生きることを望む生活者の一人として、古典や文芸の価値を深めることが大切である。その動機づけが、保育者養成のカリキュラムの中に、きちんと位置付けられなければならない。そのためには、人生の目的として関わるができるような文化・芸術の価値に接する機会を、保育者養成の一環として持つことが大事である。たとえば、万葉集を繙いてみれば、そこには、生活をかくあるものになりたいと願う人々の祈りの言葉、様々な不安や死者の魂を鎮めるための鎮魂の言葉、四時の移り変わりに命あることの喜びをかみしめる祈りの言葉、生活の繁栄に関わる恋の成就に関わるエネルギーの籠もった言葉、愛する人を愛しむ祈りの言葉など、われわれの祖先が大切にきたこまやかな心の凝縮を見いだすことができる<sup>38)</sup>。それは、日々の生活を精一杯生きた先人の営みに培われた叡知の世界である。こうした古典の言葉を心の糧として、われわれの日々の生活を愛する心を育てることが、生活技術を磨く一つの方法である。

こうした古典教養教育に加えて、もう少し保育に近いところで、保育者自身の暮らしへのまなざしを豊かにできる方法として考えられるのが、絵本の活用である。よい絵本は、選り抜かれた言葉と細やかな愛情が込められた絵によって構成される芸術品であり、人としてよりよく生きるにあたって大切な考え方が、力ある簡潔な言葉で物語られている。この絵本を、子どもに読み聞かせるものとしてだけみるのではなく、保育者自らがそこに人間の暮らしや命の本質を見つめる教養教育の教材として活用するのである。

試みに、「名作絵本」とされるものの中から、マリー・ホール・エッツの『もりのなか』<sup>39)</sup>を取り上げてみる。この絵本は、子どもの遊びの世界が楽しく描かれているが、それにとどまらず、人間にとっての遊びの本質を描いた名作とされる<sup>40)</sup>。物語の冒頭、主人公の「男の子」は、紙の帽子をかぶり、ラッパを持って「変身」する。「変身」は、「遊びの始まり」の象

徴である。そうして、「日常生活」とはちがう「非日常」の「森」へと入っていく。この「非日常性」も「遊び」の世界の特徴である。その「森」の中で、ライオンやゾウの子、クマやカンガルー親子にサルが加わって「男の子」とパレードをする「変装行列遊び」が始まる。大きい者も小さい者も、活発な者も寡黙な者も、それぞれ個性を持った動物（松居によれば、これらの動物は、「動物ごっこ」のごっこ遊びに興じる子どもたちと見なすこともできる<sup>41)</sup>）が集まって、この遊びの時空間を共有する。仲間で、ままごとをしたり、おやつを食べたり、「ハンカチ落とし」や「ロンドン橋落ちた」などの鬼遊びをする。鬼遊びは、どんな未開地域にも見ることのできる、汎人類的な文化のかたちであり、宗教行事の鬼祓いであると同時に、子どもたちが熱中する遊びの姿である<sup>42)</sup>。そして、最後に、究極の鬼遊びであるかくれんぼをして、主人公の男の子が鬼になって目を開けてみたら、一緒に遊んでいた動物たちがいなくなっている。代わりに「男の子」のお父さんが場面に現れて、「もう遅いよ、おうちにかえろ」と、この男の子を非日常から日常の世界に連れ戻す。これで、「遊び」は終わる。「始まり」があって「終わり」がある。これが、「遊び」の法則である。ここで、お父さんの「また今度来るときまで、みんな待っていてくれるから」という言葉が、男の子をただ現実に戻すのではなく、夢を与える。そうして、男の子は安心して、家路へとつく。子どもの気持ちを引き止めてくれるお父さんの肩車にのって、お父さんより高いところから、「小さな巨人」<sup>43)</sup>となって風景を眺めながら帰る男の子の幸せな後ろ姿に、子どもと親、子どもと家族のあるべき姿を考えさせられる。

そうして、主人公の「男の子」と、「男の子」と一緒に遊んだ動物が画面から消えて、残るのは「しずかな森」の風景である。全ての生き物が消えた木々の姿の空間に、「男の子」と動物が、時を忘れて熱中して遊んだ喜びの余韻が、響く。同時に、木々の命、そして木々の向こうに息をひそめる生き物の息づかいが伝わる。森の沈黙は、命の息吹を内包する大いなる沈黙である<sup>44)</sup>。森は、人に喜びや憩い、人間の想像力の源泉を与えてくれる。森の源には命の始まりとなる水がある。命の再生を司る大地がある。同時に、人間の営みにかかわらず、自然は静かにそこにあり続ける。人間の営みを越えた、自然の恵みの

大きさを、物語の最後に置かれた一枚の絵が考えさせる。

このように、この短い物語絵本の中に、子どもにとっての、あるいは人間にとっての遊びの価値と、友人や家族の大切さが深く物語られている。さらには、人間の営みを包み込む大いなる自然の価値が、深く感受できる要素が盛り込まれている。こうした絵本が示す叡知を繙き、自分の生き方との関わりの中で深めあう内容が、保育者の教養教育に求められる。

「古典」とされる書物が長い年月の風雪を越えて残り続けるのは、そこに人間の精神の拠り所とすべき価値があり、年齢を重ねるにつれ、その深みを自らの生き様に重ねることができるからである<sup>45)</sup>。それと同じように、絵本の中でも長い年月愛され続ける古典的絵本には、人が生きることの本質に深く関わるものが内在している。絵本のそうした側面に着目して、絵本の言葉に人間の叡智を学びあう学習機会があれば、「保育教材としての絵本」という視野を超えて、自らの人生の拠り所となる考え方をそこに見いだしていくことができる。そのことは、保育者自身の「生活文化の創造」に寄与する。そして、よい絵本を選び取り、子ども達に大切に伝えていくことの意味が深まる。

このように考えると、保育者養成の教養教育として、「絵本のグレート・ブックス」<sup>46)</sup>とも呼ぶべき絵本を選定し、その中に見いだせる叡知の世界を学びあう教養教育が課題となる。そこでは、長く読み継がれてきている絵本を鑑賞して、その有する魅力を皆で話し合い、生活感覚との関わりで意味を抽出していく「下からのアプローチ」と、人類普遍に求められる真善美といった理念から絵本の言葉を深める「上からのアプローチ」の両方がある。その際、日本人が古典として大切にしてきた、古事記、万葉集、古今和歌集、源氏物語といった日本古来の説話・物語・詩歌集、あるいは、論語や歎異抄、花伝書といった宗教・思想に関わる古典とも関わりを持たせながら、また、思想を文化の形の中で表現した能・庭園、茶道や華道等で大切にされてきた価値観と関わりを持たせながら、絵本の言葉と絵に内在する価値を考える教養教育を展開できれば、教材としての絵本を見る目を育てると同時に、これからの成熟社会にふさわしい一人ひとりの生活文化創造の確かな手立てとなるであろう。

#### 4. 「21世紀の生活文化」を意識して

ここまで「生活文化」を、個人個人が自らの暮らしに働きかけをして作り出す暮らしの姿をさすと規定して論考をすすめてきた。一方、緒言において述べたように、「生活文化」は、長い伝統の「変わらない価値」を引き継ぎながら、新しい時代に応じて、その時代の人が大切と考える価値に基づきながら変遷していく。高度経済成長時代を生きた人には、その時代の人が目指す社会の姿、目指す目標があり、それが人々の暮らしの姿も作ってきた。情報化・グローバル化が一気にすすんだ時代には、その時代のものの見方、考え方、感受性が生まれ、その時代の「生活文化」を生み出してきた。そういう時代性を考えた時に、これからの時代の「生活文化」としては、どのような方向性が考えられるであろうか。その方向性との関わりにおける保育者養成のあるべき姿とは何か。

それには、20世紀社会の振り返りが必要となる。ここでは、20世紀を代表する社会心理学者エーリッヒ・フロムの指摘を一つの拠り所として、以下に考察する<sup>47)</sup>。

20世紀は、第一に「戦争の世紀」であった。二度の世界大戦を始め、朝鮮戦争、ベトナム戦争、そして、冷戦終結後には、民族紛争が続く。そして、米国に発するテロとの戦い。「トロイ戦争から一九世紀の終わりまで何千年の間に戦争で死んだ人の数と、20世紀の百年間に戦争で死んだ人の数は拮抗するのではないか」<sup>48)</sup>と指摘される通り、20世紀の科学・技術の進歩は、人間に安全で安心な暮らしをもたらしたと同時に、大量殺戮の兵器を作り、ヒロシマ・ナガサキの原爆投下がわれわれの記憶に新しいように、大規模な破壊的戦争、無差別な殺戮が行われた。兵士以外の一般市民も巻き添えにしての戦争による大量殺戮の戦争の時代であった。

第二に、「自然破壊の世紀」であった。20世紀の人類の功績として、「科学・技術の発展」が挙げられるが、それは同時に、自然環境を破壊する結果を生んだ。自然の破壊は人間の破壊でもある。今日にいたるまで、地球環境に対する人間の責務が問われ続けている。

第三に、「経済主義の世紀」であった。人力から動力への転換をその最大の特徴とする産業革命の進展は経済至上主義の社会を生んだ。それによって、強者には豊かな暮らしがもたらされたが、それは弱者搾取の上になりたつ経済でもあり、弱者には貧困が余儀なく

された。地球規模でみれば、世界の広汎な部分に飢餓が存在し、今も経済的強者支配のもと弱者搾取の構図が存在する。先進国の暮らしを支える製品は、その貧しい国の人々の労働の中に生み出されている。

第四に、「消費者パラダイス」が生まれた世紀であった。大衆は、企業による限りない欲望の開発のもと、それを即時充足することを求め、また新たな欲望がかきたてられていく。この繰り返しのよって、生活の安楽化と文化の軽薄化がすすんだ。

フロムは、こうした「20世紀の不幸」の根底には、父性原理が優位に働く社会の発展があると指摘する。父性原理とは、法律（人間の制定した掟）、秩序、理性、ヒエラルキーによって社会を律しようという考え方を優位とする原理で、理性的な愛（条件付きの愛）である<sup>49</sup>。合理的で、社会の発展に役立つものは切り捨てる冷徹な精神を持つ。フロムによれば、それは、一神教のキリスト教社会が、男性神の息吹が全ての創造の源であることを正当化するために支配的になった<sup>50</sup>。そして、この父性原理が西洋の文明社会を作ってきたが、その限界は上述したような「20世紀の不幸」に示されている。

「20世紀の不幸」の反省に立つと、21世紀は、「拡大と闘争の男性原理ではなく、再生と循環の女性原理が優位に働く社会」が志向される<sup>51</sup>。男性原理に対して女性原理は、「無条件の愛、自然的平等、血および土との絆の強調、同情と慈悲」<sup>52</sup>の上に立っており、「生命と統一と平和」に価値をおく<sup>53</sup>。これは、女性が自ら持つ「産みの能力」すなわち自然的生産性から生じる本性である。女性は「幼児を世話しつつ、己の愛を、自己自身を超えて他の人間へと広げ、そして他の人間を保護し美化するために、あらゆる才能、想像力を傾ける」ものであり、その本性に基づく母権制の原理は、「すべてを包括する原理」である<sup>54</sup>。しかしながら、母性的原理は、情緒的で誰をも平等に扱おうとするがゆえに、悪しき甘えも許容する。その結果、いわば「いつまでたっても自律できない乳飲み子」という心理状態の大衆を社会的に排出する可能性もある<sup>55</sup>。従って、フロムは、「母性的愛には正義と合理性の、父性的権威には慈悲と平等の音調を与え、父権制原理と母権制原理とが一つに総合されていくような方向性」が求められるとする<sup>56</sup>。これからは、社会の進歩的発展を支えた男性的原理と、博愛の女性的原

理を融合させていくことが望まれる。それは、古代に戻るというのではない。また、母性の絶対的価値を声高に主張するのでもない。これまでの近代文明が男性原理のもとに作り上げてきた便利で安心で機能的な豊かな社会を享受しながら、男性原理と女性原理を融合し、精神性高い愛に基づく社会を何とか作り上げ行くことが、21世紀にめざされる「生活文化」の姿となる。

そのためには、女性原理の健全なる復権が求められるが、それは「母なる大地」を大切にすることに関係する。なぜならば、大地は、命を育み育てて恵みをもたらし、冬には枯渇して一たん死んで、また春の命が芽吹く命を支える性質を有するからである。このことに鑑みて、古来、地上の母は、大地母神デーメテルの似姿と捉えられ、命を生み出す女性は、「大地原母の代理人」とされた<sup>57</sup>。従って、「母なる大地」への愛は、女性原理の源である命の営みを大切に考えることへとつながる。

こうしたことから、「21世紀の生活文化」の課題を「自然生活の価値の再発見」と置いてみると、絵本には、自然の世界の豊かさと人間にとっての大切さを示す力量ある絵本が数多くある。松居は、「いつの時代にも読者に語りかけるものを持っていて、通り過ぎるだけの作品ではない。立ち止まり、座り込み、耳を傾け、目をこらし、心躍らせて見る。そしていつまでも心に残って、その印象、体験は読者が成長するに従って、より深く理解され、意味を持つてくる」ような「本当に力を持った絵本」の根底にあるものは、「人間と自然を真正面からまじろぎもせず見つめつづける眼である」と指摘する<sup>58</sup>。その代表格として松居が挙げるのは、ビアトリクス・ポターの『ピーターラビットのおはなし』<sup>59</sup>である。一見「かわいらしい」キャラクターだが、それは決して甘い筆致ではなく、実に精密の一つひとつの生きものの姿を写し取っている。そして、食うか食われるかの厳しい生物界の現実をきちんと物語の中に描き込みながら、ファンタジー豊かなおはなしが完結する。目に見える自然世界の現実と目に見えないところにある空想が見事に融合して、「私たちの生きている世界の真なる姿」<sup>60</sup>を示す。

また、先に提示した「20世紀の不幸」を端的に示す作品に、バージニア・リー・パートンの名作『ちいさいおうち』<sup>61</sup>がある。この絵本は、近代化のプロセスが、いかに大地を奪ってきたのか、そしてそれが、

いかに人間の生活を殺伐としたものにしたか、それを回復するには大地の恵みある自然生活に戻る事がいかに大切かを、美しい色合いの丁寧な絵とともに語りきかせてくれる。その絵と語りの丁寧さ、内容の深さが生み出す力は、他の追随を許さない。

ロングセラーとなった『葉っぱのフレディ』<sup>62)</sup>は、まさに、この大地の営みの循環を描いた本である。生き物には一つひとつ個性があって、それぞれが生まれ落ちた環境の中で精一杯生きるのが命の姿であり、個体の命は必ず死を迎えるが、大地へと帰り、次の命の源となることを静かに語る。この絵本は、ホメロスの有名な「木の葉のたとえ」を思い起こさせる。「わたしの素姓などをどうして訊ねる。人の世の移り変りは、木の葉のそれと変りがない。風が木の葉を地上に散らすかと思えば、春が来て、蘇った森に新しい葉が芽生えてくる。そのように人間の世代も、あるものは生じ、あるものは移ろうてゆく。」<sup>63)</sup>

すべての葉は共通の一本の木が母。葉から葉は生えない。そうして、一枚一枚の葉が枯れて地面に落ちるのは、次なる命の再生のために必ず必要であり、それを受け止めた大地が、あらたなる命を誕生させる。

今日の生命科学が明らかにしたところによれば、あらゆる生命は、38 億年の昔に海の中で生じたと考えられる「たった一つの細胞」に端を発して進化して今日に至るといふ<sup>64)</sup>。その歴史は、パートンのもう一つの名作『せいめいのれきし』<sup>65)</sup>によって語られている。また「細胞」を受けつぐ一個の命が、母の胎内に宿されて「私」が生まれ出ることを絵本『赤ちゃんのはなし』<sup>66)</sup>は、丁寧に説明をしていく。私の命は、自分だけの命なのではなく、長い歴史の中に育まれてきた人為を超えた大切な命であり、それを精一杯生きて、次の世代につながるごとに自然の本質はあり、人間の歴史があることを、これらの絵本はしっかりと教えてくれる。

このように、力ある自然絵本の中から、「母なる大地」「母なる自然」の価値を考えさせる絵本を選び取り、そこにある自然と人間の本質を保育者自らが学ぶことは、再生と循環の女性原理の復興が望まれる 21 世紀の生活文化の創造に、大切な役割を果たす。そして、「自然の力」を深く理解した保育者が、子どもたちにも「自然の力」を大切にしたい、大地に根ざした保育を行うことは、「地球市民」の基礎を育み、これからの地球環

境を守り育てる地盤となる。このように考えると、「自然の価値」へ誘う絵本を選択して、その価値を深めることも、「絵本のグレート・ブックス」の重要な課題である。

## 5. まとめ

本稿では、保育者の質的向上が社会的要請であることを前提に、保育者の総合的な人間力を高め、その人間性を豊かにするための保育者養成のあり方について、「生活文化」という概念から拓がる可能性についての検討を行った。そこで明らかになったことは、①「生活文化」を形作る基本要素として「文化の価値」「遊びの価値」「自然の価値」の享受を上げることができると、②そうした価値を大切にしたい暮らしを保育者自身が志向することが、保育の質にも影響を及ぼすと考えられること、③生活文化の担い手を育てるといふ観点からの保育者養成として、保育者の文芸・芸術の享受能力を高めることが大切であること ④それは同時に、絵本の価値を活かすこともつながること、⑤ 21 世紀の生活文化として、「女性の力」「自然の力」への意識を持つことが大切であり、そのこともまた、絵本への見方を深める可能性があることが明らかになった。ここで論考されてきたことは、理念的なものであるが、この理念のもと、具体的な営みをすすめていくことができれば、「即戦力」としての保育者養成を超えて、より広い人間的幅を持った保育者を育てるその原点を育むための体系的な保育者養成の教養教育カリキュラムの第一歩となるであろう。

ドイツの児童文学者ミヒャエル・エンゲの童話『モモ』の寓話の中で、主人公の女の子モモが「時間泥棒」に時間が盗まれなかったのは、彼女が、人間の時間の本質である「心の時間」を確実に生きていて、節約すべき時間が心の中になかったからであった<sup>67)</sup>。そのモモと同じように、自らの「生きた時間」を働かせる確かな自分の居場所を持つことが、これからの生活文化の創造に大切である。保育者自身が、自らの暮らしを「文化の価値」「遊びの価値」「自然の価値」で満たしながら、「自分の人生」を生きていく。保育者が、自らの生活文化に幸福を感じながら、それを保育の仕事につなげていく。そして、21 世紀の生活文化の担い手の一人であり、「地球市民」として生きる子ども

の仕事と自分自身の暮らしの成熟とが一体化していくようなものの方へ誘うことが、生活文化の概念を通してきた保育者養成の姿として、望まれるのである。

## 【註および引用文献】

- 1) 岩崎美智子：学生に期待される学び——保育者養成校における「教養教育」——、東京家政大学研究紀要、第47集(1)、pp.55-63(2007)。
- 2) 海口浩芳：保育者養成における専門性確保の問題——保育者は「専門職」たりえるか——、北陸学院短期大学、研究紀要、第39号、pp.35-44(2007)。
- 3) 水野いずみ・松田純子・須賀恭子：保育者養成における教養教育の必要性——特別教養プログラムの開発——、実践女子大学生生活科学部紀要、vol.45、pp.87-98(2008)。
- 4) 海口：同上。
- 5) 小塩節他：暮らしの哲学としての生活文化、p.58、PHP研究所(1997)。
- 6) 神谷美恵子：生きがいについて、みすず書房(2006)。
- 7) 岡沢憲美：生活文化の時代、早稲田大学出版部(1995)。
- 8) 三木の「生活文化と生活技術」が発表されたのは『婦人公論』誌であるが、同様の内容を昭和16(1941)年1月1日の読売新聞紙上に「新しい考え方、見方、生活の仕方」と題して発表し、「生活そのものが人間の作るものとしての文化であるという観念が確立され、すべての人間が文化人たることを希求する」と論じている(三木清全集第15巻所収、中央公論社、1967)。また、「文化政策論」(1940年12月)『中央公論』にも、生活文化について述べられている(三木清全集第14巻所収、中央公論社、1967)。この時代、自由意志を持って暮らしに働きかけをしていくことこそ「文化的存在」である人間の姿であることを、「生活文化」という言葉に託して述べ、そうした生き方を、広く大衆の生活の中に浸透させていくことの大事さを、この一連の論考で三木は訴えている。
- 9) 小塩：同上書、p.11。
- 10) 三木清：文化政策論(1940)、三木清全集第14巻所収、中央公論社、p.359(1967)。
- 11) 同上書、p.360。
- 12) 同上書、p.390。
- 13) 安田喜憲：一神教の闇、ちくま新書、p.74(2006)。
- 14) 宮田登：近世のこども歳時記・解説、岩波書店(2001)。
- 15) 三木は、揺れ動く青春の日々の中、「哲学に生きる」ことに意を決した思いを吐露した「語られざる哲学」という若き日の論考の中で、「美しき芸術に感じ、正しき真理に驚き、よき行為を畏れる心に恵まれてきた」ことに自らの哲学の心は端を発することを言明している。そして、プラトンの「永遠なるものの存在」「永遠なる魂の故郷への憧憬」に深く惹かれ、自己の魂の奥に確かな拠り所を持ち、その永遠なる価値を憧れ求める文化的生活を築いていくことが自らの依って立つ立場であることが、静かに、かつ情熱的に語られている。枘田啓一郎

の解説によれば、この論考は、「著者の人と思想を知る上にきわめて貴重な記録」であり、「後の思想の根本的、本質的な一面の原型が示されている」という(三木清、語られざる哲学、三木清全集第18巻所収、中央公論社、1968)。

- 16) 今道友信：美について、講談社現代新書、p.12(1973)。
- 17) 三木：同上書、p.396。
- 18) 同上書、p.396。
- 19) 三木清は、ドイツ留学先で師事したハイデガーからアリストテレスの研究をすすめられ(宮川透：三木清、東京大学出版会、p.45、2007)、アリストテレスに関する著作を残している(三木清全集第9巻所収、中央公論社、1967)。それらにおいては、アリストテレスの仕事の中でも、特に、政治学と倫理学を取り上げて、人間の幸福についてのアリストテレスの哲学を紹介している。アリストテレスは、人間の暮らしを①享楽的生活、②政治的生活、③観想的生活に分け、いずれの生活も人間が健康に健全に生きるためには必要であるが、人生の究極の目的とすべきは、真善美の価値を拠り所とする観想的生活であることを示している。このアリストテレスの考え方に学んでいる三木がここで「娯楽の価値」と言っているのは、それを「全人的価値」との関わりで述べているところから、真善美の価値に近づくことを目的とする文芸・芸術活動のロゴスの生活をも含んで指すものと考えてもよいであろう。
- 20) 三木、同上書、p.395。
- 21) 「遊び」の中に、人間の文化は生まれる。文化は遊びに接ぎ木されるものではない。「遊び」そのもの、その形態の中に、振り返れば人間の文化は形作られていくのだ。参照：ヨハン・ホイジンガ(高橋英夫訳)『ホモ・ルーデンス』中央公論社、p.15(1973)。
- 22) 天野正子、「生活者」とはだれか、p.27、中央公論社(1996)。
- 23) 三木清：読書遍歴(1941)、三木清全集第1巻所収、p.370、中央公論社(1966)。
- 24) 同上書、p.373。
- 25) 天野、同上書、p.28。
- 26) 三木、同上書、p.373。
- 27) 三木、前掲書(全集第18巻)、p.28。
- 28) 三木清：コラム『東京だより』(1938)、三木清全集第16巻、p.525、中央公論社(1968)。
- 29) 三木清：パスカルに於ける人間の研究(1926)、三木清全集第1巻、p.18、中央公論社(1966)。
- 30) 三木清：新しい人間の哲学(1934)、三木清全集第10巻、p.349、中央公論社(1967)。
- 31) 稲垣良典：トマス・アクィナス倫理学の研究、p.185、九州大学出版会(1997)。
- 32) 三木、同上書、p.397。
- 33) 同上書、p.398。
- 34) 「あらゆる技術にとって一つの根本概念は形 Form の概念である」「技術は人間の意欲に物的な形を与えるものである」三木清：構想力の論理(1939)、全集第8巻所収、p.227、p.228、中央公論社(1967)。「新しい論理は形を行為或いは実践の立場から捉えねばならぬ。形を実践の立場から捉えるというのは技術の立場に立つことである」三木清：哲学ノート(1939)、全集第10巻所収、p.458、中央公論社(1967)。

- 35) 「人間の行為はすべて技術的であるといえるのである。人間の生活はつねに環境における生活であるが、人間は主体として環境に対立し、この主体と環境との対立を媒介するものが技術である」(技術哲学、全集第 7 巻所収、p.210, p.211) 「技術と構想力との内面的な関係は、技術にとっての根本概念が形であるというところに存している」(技術哲学、全集第 7 巻所収、p.237).
- 36) 「西洋における近代的ヒューマニズムの人間中心主義に対して、東洋的ヒューマニズムにおいては人間と自然とが連続的に見られている」三木清：哲学ノート (1939)、全集第 10 巻所収、p.464、中央公論社 (1967).
- 37) 今道友信：ダンテ『神曲』講義、p.9、みすず書房 (2000).
- 38) 岡野弘彦：万葉の歌人たち、NHK 出版 (2005).
- 39) マリー・ホール・エッツ (まさきりこ訳)：もりのなか、福音館書店 (1963).
- 40) 松居直：絵本のよろこび、pp.22-43、NHK 出版 (2003).
- 41) 同上書、p.33.
- 42) かかさとし：鬼遊び、青木書店 (1986).
- 43) 長田弘：肩車、講談社 (2004).
- 44) 今道友信：自然哲学序説、pp.205-221、講談社 (1993).
- 45) クラシック (classic) の語源は、古代ローマの国家の危機に、艦隊 (classis) を寄付できる富裕層からきている。そこから転じて、人間の精神の危機の際に生きる力を与えてくれるような深い内容をもった文芸・芸術をクラシックと称するようになった。(今道：前掲書、p.5).
- 46) ここで「グレート・ブックス」とは、上記概念に基づく古典的書物のことをさす。20 世紀アメリカの哲学者の一人、モーティマー・アドラーは、西洋の思想の糧となる主要な教養書を選び、それをグレート・ブックスと称し、生涯にわたってこうした書物を読み精神を豊かにしていく人生が、ものからこころの成熟社会に相応しいライフスタイルであることを提唱した。「絵本のグレート・ブックス」は、このアドラーらの考え方に着想を得ている。
- 47) ここでは、エーリッヒ・フロム (滝沢海南子、渡辺憲正訳)：愛と性と母権制、新評論 (1997) における記述をもとにまとめている。
- 48) 加藤周一：私にとっての 20 世紀、p.13、岩波書店 (2009).
- 49) フロム：同上書、p.143.
- 50) 同上書、p.200.
- 51) 安田、同上書、p.66.
- 52) フロム、同上書、p.246.
- 53) 同上書、p.244.
- 54) 同上書、p.244.
- 55) 同上書、p.246.
- 56) 同上書、p.249.
- 57) J.J. バッハオーフェン (岡道夫・川上倫逸監訳)：母権論 1、p.14、みすず書房 (1991).
- 58) 松居直：絵本を読む、p.139、日本エディタースクール出版部 (2004).
- 59) ピアトリクス・ポター (いしいももこ訳)：ピーターラビットのおはなし、福音館書店 (1971).
- 60) 松居、同上書、p.146.
- 61) バージニア・リー・バートン (いしいももこ訳)：ちいさいおうち、福音館書店 (1981).
- 62) レオ・バスカーリア (みらいなな訳)：葉っぱのフレディ、童話屋 (1998).
- 63) ホメロス (松平千秋訳)：イリアス (上)、p.189、岩波書店 (1997).
- 64) 中村桂子：ものみな一つの細胞から、いのち愛づる姫、pp.64-73、藤原書店 (2007).
- 65) バージニア・リー・バートン (いしいももこ訳)：せいめいのれきし、岩波書店 (1964).
- 66) マリー・ホール・エッツ (坪井郁美訳)：赤ちゃんのはなし、福音館書店 (1982).
- 67) ミヒャエル・エンデ (大島かおり訳)：モモ、岩波書店 (1976).